

**【旧約聖書日課】歴代誌下 7章11～16節**

<sup>11</sup>ソロモンは主の神殿と王宮を完成し、この神殿と王宮について、行おうと考えていたすべての事を成し遂げた。<sup>12</sup>その夜、主はソロモンに現れ、こう仰せになった。

「わたしはあなたの祈りを聞き届け、この所を選び、いけにえのささげられるわたしの神殿とした。<sup>13</sup>わたしが天を閉じ、雨が降らなくなるとき、あるいはわたしがいなごに大地を食い荒らすよう命じるとき、あるいはわたしの民に疫病を送り込むとき、<sup>14</sup>もしわたしの名をもって呼ばれているわたしの民が、ひざまずいて祈り、わたしの顔を求め、悪の道を捨てて立ち帰るなら、わたしは天から耳を傾け、罪を赦し、彼らの大地をいやす。<sup>15</sup>今後この所でささげられる祈りに、わたしの目を向け、耳を傾ける。<sup>16</sup>今後、わたしはこの神殿を選んで聖別し、そこにわたしの名をいつまでもとどめる。わたしは絶えずこれに目を向け、心を寄せる。

**【使徒書日課】エフェソの信徒への手紙 3章14～21節**

<sup>14</sup>こういうわけで、わたしは御父の前にひざまずいて祈ります。<sup>15</sup>御父から、天と地にあるすべての家族がその名を与えられています。<sup>16</sup>どうか、御父が、その豊かな栄光に従い、その霊により、力をもってあなたがたの内なる人を強めて、<sup>17</sup>信仰によってあなたがたの心の内にキリストを住まわせ、あなたがたを愛に根ざし、愛にしっかりと立つ者としてくださるように。<sup>18</sup>また、あなたがたがすべての聖なる者たちと共に、キリストの愛の広さ、長さ、高さ、深さがどれほどであるかを理解し、<sup>19</sup>人の知識をはるかに超えるこの愛を知るようになり、そしてついには、神の満ちあふれる豊かさのすべてにあずかり、それによって満たされるように。

<sup>20</sup>わたしたちの内に働く御力によって、わたしたちが求めたり、思ったりすることすべてを、はるかに超えてかなえることのおおきになる方に、<sup>21</sup>教会により、また、キリスト・イエスによって、栄光が世々限りなくありますように、アーメン。

**【福音書日課】ヨハネによる福音書 10章22～30節**

<sup>22</sup>そのころ、エルサレムで神殿奉献記念祭が行われた。冬であった。<sup>23</sup>イエスは、神殿の境内でソロモンの回廊を歩いておられた。<sup>24</sup>すると、ユダヤ人たちがイエスを取り囲んで言った。「いつまで、わたしたちに気をもませるのか。もしメシアなら、はっきりそう言いなさい。」<sup>25</sup>イエスは答えられた。「わたしは言ったが、あなたたちは信じない。わたしが父の名によって行う業が、わたしにつ

いて証しをしている。<sup>26</sup>しかし、あなたたちは信じない。わたしの羊ではないからである。<sup>27</sup>わたしの羊はわたしの声を聞き分ける。わたしは彼らを知っており、彼らはわたしに従う。<sup>28</sup>わたしは彼らに永遠の命を与える。彼らは決して滅びず、だれも彼らをわたしの手から奪うことはできない。<sup>29</sup>わたしの父がわたしにくださったものは、すべてのものより偉大であり、だれも父の手から奪うことはできない。<sup>30</sup>わたしと父とは一つである。」

## 《キリストの住まい》【こども説教のために】

日曜日に教会に集まって来られた皆さんは、もちろん、礼拝にあずかられるためにお出でになられました。礼拝で、讃美歌を歌い、祈りを共にし、聖書の御言葉を聞き、心を新たにされて、新しい一週を歩んでいく力を得て、家へ帰って行かれます。その皆さんが礼拝にあずかっている時間は、日曜日の朝の一時間だけです。毎週欠かさず続ければ、一年間で 50 時間以上を礼拝のために用いることとなります。決して少ない時間ではありません。

それだけの時間を用いて礼拝にあずかるのは、わたしたちの讃美の歌が上達するためでしょうか。聖書の知識が豊かになるためでしょうか。歌が上達したければ、合唱団や「歌おう会」に参加した方がよいでしょう。聖書の知識を豊かにしたければ、教会でもカルチャースクールでも聖書講座があります。

わたしたちは礼拝で、何よりも神にお会いしようとしています。神の御前に近づかせていただき、御名をお呼びして、祈ります。神の御声をお聞かせいただけるように心を開いて、耳を傾けます。

神にお会いいただけたら、どんなにか素晴らしいことでしょう。けれども、毎週礼拝に集って来られていても、神にお会いいただいているかどうかわからない、という方もあるのです。そういう方は、案外多いかもしれません。それは、わたしたちと神との間には、大きな隔りがあるからです。

ところが、主イエス・キリストは、その大きな隔りを埋めてくださったのです。主イエスと出会った弟子たちは、主イエスが神を「父」とお呼びするほど神と近いところで生きていらっやったことに気づかされました。主イエスご自身が「わたしと父は一つである」とおっしゃるほどだったのです。直弟子たちは、その主イエスと一緒にいることを通して、「父」である神とお会いさせていただいたのです。

主イエスを直接知らなかった新しい弟子たちも、直弟子たちを通して主イエスを知るようにされました。使徒パウロは、そのようにして知ることになった主イエス・キリストが自分の心の中にお住みくださっている、と言っています。

わたしたちは、主イエスの弟子たちの教会に招かれてきています。その皆さんの心は、《キリストの住まい》となるのです。そのキリストを通して、わたしたちは皆、神とお会いさせていただいているのです。

## 《祈りの家》を新たに！

教会堂をいつでも開放していると、いろいろな方が訪ねて来られることがあります。教会やキリスト教のことをよく知らない方が来られることもあります。「礼拝堂を見せてください」と言われてご案内すると、「どこに向かってお祈りしたらよいですか」「神さまはどこにいらっしゃるのか」と尋ねられることがあります。皆さんであればどのようにお答えになるのでしょうか。皆さんはどうなさっているのでしょうか。

旧約聖書の世界の人々は、神とお会いするための特別な場所を設けることが常でした。旧約聖書日課（歴代誌下 7 章）では、その代表的な場所であるエルサレムの神殿をソロモン王が建築し終え、奉獻の祈りをささげたときのことが語られていました。前のほうから気をつけて読んでみると、ソロモンは民と共に神殿で奉獻の祈りをささげて盛大に祝ったのですが、そのソロモンの前に神が現れてくださったのは、そのときではなく、その日の夜だったというのです。おそらく、ソロモンはすでに神殿から王宮の自室に帰っていたでしょう。寢床に就いていたのかもしれませんが。ソロモンのささげた祈りに応えて神がお会いくださったのは、神殿ではなかったようなのです。

確かに、ソロモン自身、神殿奉獻の祈りの中で、「神は地上にお住まいにはなられない」「人が建てた神殿など、神の住まいにふさわしくない」とも言っているのです（代下 6 章）。そして、実際にソロモンは、神殿ではなく、自分の寝室で神にお会いいただくことになったのです。

それでは立派な神殿を建てた意味がないのかと言えば、そんなことはありません。ソロモンの寢床に現れてくださった神は、ソロモンが建てた**神殿を選んで聖別**し、そこでささげられる祈りに、ご自身の**目を向け、耳を傾ける**、とお告げくださったのです。神殿が「祈りの場」となるならば、そこに神が**目を向け、心を寄せ**、祈る者とお会いくださる、というのです。

そのソロモンの建てた神殿が幾度かの災厄に見舞われながらも神殿として再奉獻されてきたことを記念する「神殿奉獻記念祭」と呼ばれる祭に、主イエスが参加されたことを、福音書日課（ヨハネ 10 章）は伝えています。この祭は、「宮清めの祭り」とも呼ばれるものです。このこととは別に四つの福音書は共通して、主イエスが「宮清め」をなさったという出来事を伝えています。主イエスが神殿の境内で商売をしている人々を追い出されて、「わたしの父の家を商売の家にしてはならない」（ヨハネ 2:16）、「わたしの家は、祈りの家と呼ばれるべきである」（マタイ 21:13）とおっしゃられたのです。旧約の「神殿」を文字通り訳せば「神の家」ですから、このように言われたのです。

残念ながら、エルサレムの神殿が「祈りの家」として存続することはありませんでした。それは、「祈りの家」がまったく新たにされなければならなかった、ということなのではないでしょうか。

## キリストと共に祈る家で…

確かに、エルサレム神殿がローマ軍に破壊された後、「祈りの家」をまったく新しく再建した者たちがいたのです。後にキリスト教徒と呼ばれる者たちと、ユダヤ教徒として会堂に集い続けた者たちです。

キリスト教徒となった者たちとユダヤ教徒として生きた者たちには、共通点も多くありました。しかし、決定的な違いもありました。その違いは、使徒書日課（エフェソ3章）でパウロが言うように、キリストが信仰者の心の内にお住まいくださるようになるということ信じることかどうかの違いだと言うことができるかもしれません。

わたしたちは、「キリストの弟子になる」と言います。「キリストに従う」とも言います。けれども、パウロはむしろ、「あなたがたは神の子、わたしたちの主イエス・キリストとの交わりに招き入れられた」（Iコリ1:9）と言うのです。わたしたちのほうが主イエス・キリストを偉大な師として認めて弟子入りした、というのではなくて、神がわたしたちを選び出してくださり、キリストとの交わりの中に招き入れてくださった、というのです。そのことのしるし、キリストと結ばれたしるしとして、わたしたちは洗礼にあずかったのだ、というのです（ローマ6:3など）。主イエスご自身も、弟子たちに「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ」（ヨハネ15:16）とおっしゃられたことがありました。わたしたちは、神がわたしたちを主イエス・キリストと堅く結び付けてくださったという、この不思議な事実を認め、受け入れて、そこから神との信頼関係を始めるのです。

もちろん、このキリストは、空想上の存在ではありません。二千年前の中東で、「ナザレのイエス」と呼ばれた実在の人物です。十二弟子をはじめとする多くの弟子と、寝食を共にする日々を過ごされました。弟子たちは、その言葉と働きに触れ、向き合い、理解しようとしていました。しかし、容易に理解することはできませんでした。それでも、その方のもとに留まり続け、言葉と働きに触れ続け、向き合い続けました。そこから、神に信頼する新しい生き方が始まったのです。

わたしたちの心の内にお住まいくださるキリストとは、この「主イエス・キリスト」なのです。わたしたちの好みに合ったお方ではなく、わたしたちの考えを簡単に肯定してくださるお方でもなく、しかし、どこまでもお語りくださり、働きかけてくださり、向き合ってくださいのお方です。この方とどこまでも向き合い続けさせていただくとき、わたしたちは、この方の留まり続けられたお方、神に触れさせていただく経験をするのです。この方が耳を傾け続けられた神の御声を聞き分ける方法を、分からせていただけるようになるのです。

ここに、そのキリストのお住まいくださっている皆さんがいらっしゃるのです。だから、ここで、わたしはキリストと向き合う。ここが、わたしの神に祈る家なのです。ここに、あなたも、あなたの家族も招かれているのです。